

# 日本語未習留学生を1年半で専門分野へ近づけるために

山口和代・梅田康子

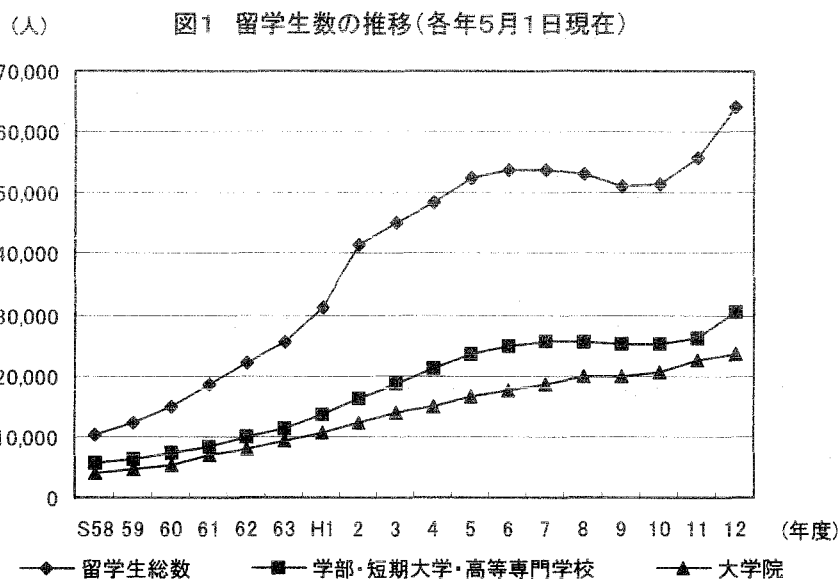
YAMAGUCHI Kazuyo・UMEDA Yasuko

南山大学総合政策学部

Nanzan University: kazuyoy@ps.nanzan-u.ac.jp、umeda@ps.nanzan-u.ac.jp

## 1. 新たな留学生政策の展開

昭和58年の「21世紀への留学生政策に関する提言」および昭和59年の「21世紀への留学生政策の展開について」において提言された、「留学生受け入れ10万人計画」に基づき、日本政府は留学生政策を「知的国際貢献」の一つとして捉えて推進してきた（留学生懇談会答申、1999）。文部省学術国際局留学生課によると平成11年度に大学等で学ぶ留学生数は55,755人となり（図1）、世界経済の悪化により一時ほどの勢いはないとはいえ、近年、留学生や海外からの長期滞在者は増加しつづけている。



従来より、日本への留学希望者に対する入学選考の手続きや方法が、留学希望者に過度の負担を強いており、これが日本への留学を躊躇させる要因の一つであるとの指摘がしばしばなされており、文部省は留学生受け入れのための関連諸施策を総合的に推進するため、近年留学生が最初に直面するハードルとなる大学等の入学選考に関して改善を行うための準備に乗り出した。

平成9年の「留学生の在り方に関する調査協力者会議」による報告では学部レベルにおいて外国人留学整数の伸びが鈍化していることが指摘され、主な問題点の一つとして「渡日前に入学許可を得ることの困難さ」が挙げられた。また、平成10年には第1回「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議が開催され、留学生に対する入学選考について、その改善方向と選考試験の在り方等について議論が行われてきた。平成12年8月にまとめられた同協力者会議の報告書には「渡日前入学許可の実現に向けて」という副題がつけられ、従来より行われてきた「国費外国人留学生・大使館推薦」と「私費外国人留学生」という二つの受け入れ過程に代わる新たな受け入れ過程の導入が示唆され、「日本留学試験」として平成13年11月に国内外において試行試験の実施が計画されている。これにより、海外にお

いても日本留学のためのアカデミック・ジャパニーズに特化した日本語教育の普及を図ることの必要性が強調されることとなった。

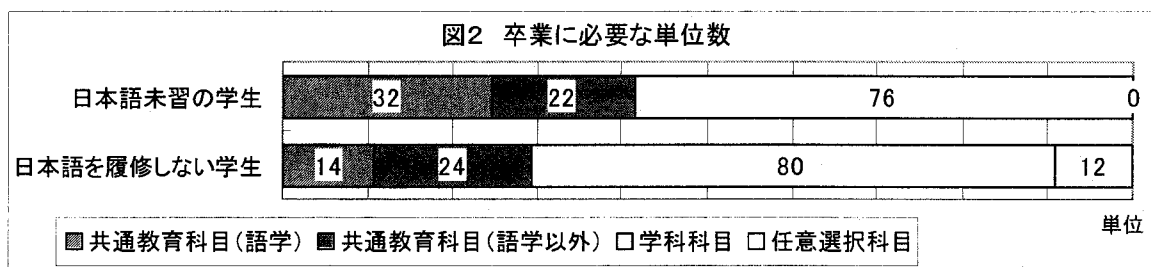
このような政府の動きに先立ち、いくつかの私立大学では既に各大学独自の方式による「渡日前入学許可」を実施し、そこでは日本語力を問わない、いわゆる「ゼロスタート」での日本語教育が学部教育の一環として実施されている。

南山大学総合政策学部でもアジアとの関係を重視し、主にアジアからの「ゼロスタート」留学生を受け入れている。本稿では、当学部の日本語未習留学生を対象とした日本語コースについて報告する。

## 2. コース概要と諸条件

### 2-1 コースの背景

2000年4月に新設された南山大学総合政策学部では、日本語未習の留学生を直接、学部1年生として受け入れ、4年間で卒業させることを目標としている。日本語コースは卒業必要単位の一部となる共通教育科目として設定されているため(図2)、最長1年半、最大32単位(約570時間)と限られた時間数で、日本語未習者に学部生として自立できる日本語力を身につけさせなければならない。このような条件下で、専門分野に対応できる日本語力を養成するためのコースデザインが必要となった。



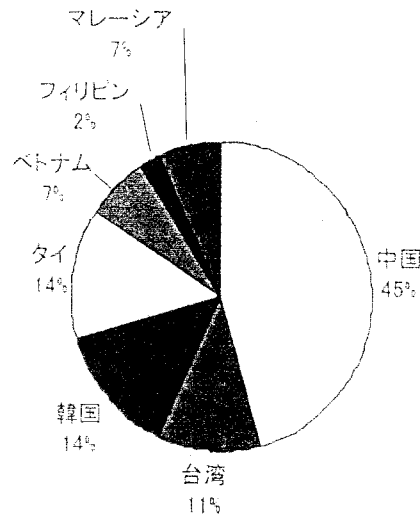
日本語コースは「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本語Ⅲ」の3レベルで構成されていて、日本語未習者は、「日本語Ⅰ」から順に「日本語Ⅲ」まで履修する。各クラスの授業時数およびサイズは表1のとおりである。

表1 コース概要

	時間数	単位数	人数
日本語Ⅰ	週12コマ×12週(最大216時間)	12単位	10名前後
日本語Ⅱ	週10コマ×12週(最大180時間)	10単位	10名前後
日本語Ⅲ	週10コマ×12週(最大180時間)	10単位	10名前後

学生はアジア各地の高校から直接入学するものが主で(図3)、そのほとんどが交流会館の寮生として日本人学生と共同生活をしている。

図3 留学生の出身別割合(%)



### 2-2 コースデザインにおける留意点

基礎から応用へという原則に則るなら、いわゆる基礎日本語力の養成を主眼とした構造シラバスでの学習修了後、専門分野に対応したトピックシラバスや大学での活動に対応したスキルシラバスへ移行するのが常道と思われる。

しかしながら、「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」の計およそ400時間修了後、学科科目を「日本語Ⅲ」と平行して履修するには、必要と思える複数のシラバスを段階を追って順に積み上げていく余裕はない。

そこで、本コースでは専門分野をにらんだトピックと学部生として必要なスキルを文構造の基礎学習の段階から織り込む方法を選択した。

シラバスデザインに際し、検討が必要だと思われたのは以下の4点である。

- (1) 総合政策の分野におけるトピックの特定とシラバス化
- (2) 本学学部生として求められる勉学を中心としたスキルの特定とシラバス化
- (3) 上記(1)(2)の学習項目の絞り込み
- (4) コース評価の方法

## 3. コースデザイン

### 3-1 コース準備

コースデザインのために、上記4点を踏まえ、以下の手順で準備を行った。

#### (1) 総合政策の分野におけるトピックの特定

総合政策学部総合政策学科では、履修のめやすとして「政策管理系」「地域総合系」「国際環境系」の3つの履修モデルを提示している。トピック特定のため、各モデルの特徴のキーワード化を試みた。結果は以下である。

「政策管理」…国政、官公庁、企業、NPO、政策立案、政策実施、政策評価、経営戦略

「地域総合」…地域社会、地域特性、地方行政、地域活性化、住民サービス、企画・開発

「国際環境」…国際社会、多国籍企業、地球環境、人口、エネルギー、地域紛争、難民、政策立案、施策実行

また、特定の国や地域に起こる個々の問題解決には文化的背景の理解が必要であるという考えから、

同学科では社会科学系領域だけでなく、文明論の重視も謳っている。

## (2) 総合政策学部で想定される授業形態の検討

国内の高等教育における授業形態では、講義、講読、口頭発表、討論などが一般的であり、本学部でも多用されると考えられる。また、視聴覚教材やマルチメディア教材は、今後も増加傾向にあるだろう。

さらに、本学部独自の方針として、外国語とコンピュータを重要なツールと考え、全学生にノートPCを1台ずつ貸与していることから、これを活用できるコンピュータ・リテラシーの獲得が期待される。

## (3) 既存教材の分析

アカデミック・スキルに焦点を当てて作成された既存の教材を分析し、そこで扱われているスキル・トピックの項目を抽出した。

分析の対象としたのは以下の教材である。

初級用教材：

『読解 20 のテーマ』『楽しく読もう I II』『話そう考えよう初級日本事情』『日本語を楽しく読む本初級』『ニュースで学ぶ日本語パート I』

中級用教材：

『文化中級日本語 I II』『日本語を楽しく読む本中級・中上級』『テーマ別中級で学ぶ日本語』『日本語作文の方法』

上級用教材：

『日本社会探検』『日本を考える 5 つの話題』『過渡期の日本を考える』『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』『テーマ別上級で学ぶ日本語』『読解演習はじめての専門書』『ニュースで学ぶ日本語パート II』『インタビューで学ぶ日本語』『「朝日新聞の声」を聴く』『講義を聞く技術』『大学授業へのパスポート』『日本語作文の方法』『実践日本語の作文』『留学生のための論理的な文章の書き方』『大学生と留学生のための論文ワークブック』『日本語口頭発表と討論の技術』『研究発表の方法』

## (4) トピックとスキルのシラバス化

(1)(2) で挙げられたトピックとスキルを (3) の既存教材のシラバスを参考にし、以下のよう

に選定した。(表 2)

表 2 選定したトピックとスキル

トピック	日常生活場面の習慣・マナー、社会生活場面の習慣・マナー、儀礼・儀式、環境・災害、教育・福祉・人権、医療・科学技術
スキル	ディスカッション、インタビュー、アンケート、情報収集 (インターネット・マスメディア・文献検索) レジューメ作成、スライド作成、口頭発表

3つの履修モデルのうち、「政策管理系」と「地域総合系 (特に日本の地域)」は、日本の文化的背景の理解が重要であると考え、初級の段階から扱うことが可能な日本文化一般に関するトピック (日常生活場面・社会生活場面) を始めに配置することとした。このトピックには、例えば男女の役割意識、上下関係、仲間意識、教育制度といったものが含まれ、これらの知識は男女雇用機会均等法、いじめ、不登校といった社会性の高いトピックの理解の下地になると考えている。また、「国際環境系」は留学生になじみのあるトピックである国際社会問題を中心に選定した。

スキルにおいては、レポート作成、口頭発表のための情報収集にも重点をおき、さまざまなメディアの利用を考慮した。

### 3-2 コースデザインとその改善

#### (1) カリキュラム・デザイン

上記のコース準備である程度選定したトピックとスキルをどの段階でどの程度織り込むかを検討した。トピック、スキルにかかる時間数の割合を徐々に増やすように設定し(図4)、各段階におけるトピックとスキルの項目を表3のように配置した(表中の斜体字は除く)。

日本語Ⅰでは、12コマのうち10コマを言語知識重視の時間とし、2コマをトピックおよびスキル重視の時間とした。前者では構造シラバスによる句型学習中心の活動を、後者では日本文化一般に関するトピックを中心に扱い、簡単なインタビューや口頭発表などの活動を行うこととした。

日本語Ⅱでは、10コマのうち6コマを言語知識重視の時間とし、4コマをトピックおよびスキル重視の時間とした。前者は読解活動を通じた文法・表現学習に充て、後者は国内外の社会問題に関するトピックを中心に扱い、インタビュー、レジュメ作成、口頭発表などの活動を行うこととした。

日本語Ⅲでは、10コマのうち8コマをトピックおよびスキル重視の時間として、国内外の社会問題に関するトピックを中心に扱い、インタビュー、文献などからの情報収集、レジュメ作成、口頭発表などの活動を行うこととした。

日本語Ⅱ、Ⅲは、日本語Ⅰに比べ日本語の学習時間自体は減っているが、トピック、スキルにかかる時間数は増えている。

また、日本語ⅡとⅢではトピック、スキルとともに重複している項目があるが、繰り返し取り扱うことによってらせん状に学習が進むことを期待している。すなわち、同じトピックでも概要理解からより深い理解へ、また、教室で得た情報の理解のみに留まらず、自ら情報源にアクセスして調べる、発表する、意見を述べる、討論する、とスキルについても複合・拡大させていくことを意図している。

図4 日本語ⅠⅡⅢでの配分

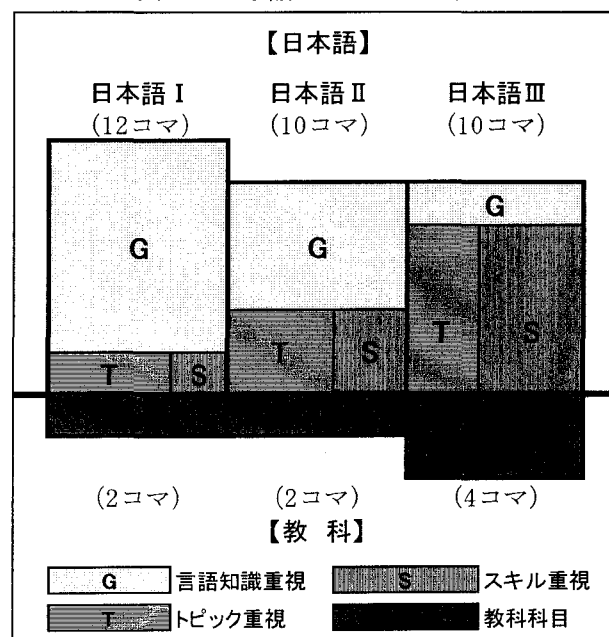


表3 トピックとスキルの配置

	トピック	スキル
日本語Ⅰ	日常生活場面の習慣・マナー（食事の作法等…） 社会生活場面の習慣・マナー（残業、割り勘…） 儀礼・儀式（お見舞、お祝い…）	ディスカッション インタビュー 口頭発表
日本語Ⅱ	環境・災害（地球温暖化・地震…） 科学技術（遺伝子組み替え・クローン…） 教育・福祉（いじめ・少子高齢化・バリアフリー…） 医療（脳死・臓器移植…）など	ディスカッション インタビュー 資料収集（インターネット） レジュメ作成 口頭発表
日本語Ⅲ	環境（エネルギー問題…） 人権（冤罪・情報公開・プライバシー・ジェンダー…） 教育（登校拒否・少年犯罪…） 医療（エイズ、アルコール中毒、人工受精…）など	ディスカッション インタビュー アンケート レジュメ作成 スライド作成 口頭発表 情報収集（インターネット・マスメディア・文献検索）

斜字…前倒し項目

## (2) コース評価の方法

日本語コースの改善に向けて、学生、担当教員、学科科目担当教員の三者からコース評価を受けることとした。

日本語Ⅲの修了生が出た時点で、修了生に対してアンケートを行い、教授方法、教授内容に関する難易度、満足度等を尋ね、同時に、担当教員間で意見交換を行い、学生のレベルに対する学習目標の妥当性、教材の適切さの評価を行う。

学科科目担当教員にはアンケートで学科科目との妥当性、学生の日本語力の評価などを依頼することとした。ただし、このアンケートは学科科目を履修する日本語コース修了生が30名程度に増えてから行うのが妥当であろうと考えた。

## 4. 結果と考察

日本語Ⅲ修了生と担当教員から得たコース評価の結果をもとに日本語コースの改善を試みた。

### 4-1 日本語Ⅲ修了生アンケートの結果

日本語コース全般に対しては、おおむね好評であった。スキルとトピックについての評価は以下に述べる。

#### (1) 日本語Ⅲで扱ったスキルについて

修了生へのアンケートは終了直後に実施し、18人中17人から回答があった。

日本語Ⅲでもっとも難易度を高く設定したレポート作成とプレゼンテーションの授業については「難しかった」(1)、「少し難しかった」(12)、「わからない」(2)、「少し簡単」(2)という結果で、少し難しいと感じている者が多かった。

また、学習したスキルについては、学科科目との関連については「役に立つ」(13)「わからない」

(4)と予想しながらも、重要性については全員の回答が「重要」で一致している。選定された項目に対する満足度は高いと考えてよいだろう。

#### (2) 日本語Ⅱで扱ったトピックについて

修了生へのアンケートは日本語Ⅱ終了直後に実施し、16人中15人から回答があった。

授業で扱った社会問題に関するトピックについて、受講前に「少し知っていた」(15)で全員の回答が一致していた。受講後「興味を持つようになった」(13)、「わからない」(2)で、必ずしも全員の興味を引くわけではなかったが、トピックへの関心はおおむね高いと見てよいだろう。また、トピックへの興味とは別に、日本語Ⅲの授業との関連について尋ねると「役に立つ」(15)、「レポートのテーマ決定に役に立つ」(14)と回答しており、トピックの重要性については理解が得られていると思われる。

#### 4-2 日本語教育担当教員からの評価

日本語Ⅱ、Ⅲでは「遺伝子組換え問題」「環境ホルモン問題」など情報の更新が活発なトピックに関しては生教材を扱うことが多かったが、日本語Ⅱ、Ⅲのそれぞれの日本語力に適した生教材が求めやすかったという意見が出た。これは、専門分野といっても、総合政策で扱うトピックが社会に密着している問題であるため、日本語Ⅰの段階から専門のトピックに近づくことができるのもこれに負うところが大きい。

スキルに関しては、各学生にノートPCが貸与されている環境をもっと有効に利用していくことが改善点として挙げられた。

#### 4-3 改善点

以上の結果を踏まえ、コースシラバスの改善点を検討した。学習項目はトピック、スキルともに大幅な変更はしないが、トピックにおいては日本文化一般に関する項目、スキルにおいてはインターネットを利用した情報収集とその口頭発表を前倒しすることとした(表3の斜体字)。

#### 4-4 今後の課題

現時点では日本語Ⅲ修了生は学科科目の履修を始めたばかりであり、十分なフィードバックを得られる状況にないが、今後は学科科目担当教員によるコース評価を実施し、日本語コースの改善に生かしたい。

また、同時に修了生への追跡調査として聞き取りを行い、多面的なコース評価を継続したいと考えている。

#### 引用・参考文献

- 留学生懇談会答申(1999)『知的国際貢献の発展と新たな留学生政策の展開を目指して—ポスト2000年の留学生政策—』平成11年3月24日留学生懇談会、学術国際局留学生課
- 安藤節子(2000)『初中級から上級までの「トピック別総合演習」』2000年度日本語教育学会秋季大会予稿集、pp.160-165